

## ■北東北三県共同展

## 描かれた北東北

会期 9月22日(水)～10月11日(月・祝) 会場 分類展示室および特別展示室

近年、岩手・青森・秋田の北東北3県は観光や産業など、さまざまな面で結びつきを深めています。3県の県立博物館はこれまでも資料調査などで協力してきましたが、今回はじめての試みとして展覧会を共同で開催することとなりました。北東北の枠組みが形成された江戸時代に描かれた絵図や風俗図絵などを通して、北東北の歴史とそこで育まれた人々の生活や文化を見つめ直そうとするものです。

## プロローグ～国絵図

現在の都道府県の区画は、古代律令制度で定められた国郡制をベースにしています。岩手・青森と秋田県鹿角郡は陸奥国(むつのくに)、鹿角を除く秋田県は出羽国(でわのくに)に属しました。しかし、古代北東北の国郡の区画は明確ではありません。蝦夷の居住地であった北東北に役人の担当エリアを示す国郡の区画は不明確でも支障がなかったものと考えられます。そして、天皇を頂点とする律令国家は形骸化していき、国郡の区画に対するこだわりも薄れていきます。

国郡の区画を再び明確にしたのが江戸幕府です。幕府は「国絵図(くにえず)」とよばれる律令の「国」を単位とする、縮尺

およそ21,600分の1の統一規格の絵図(絵画的地図)を諸大名に作成させました。絵図を献上する行為は、そこに描かれた版図を献上するという象徴的な行為で、中国や日本の歴史に度々登場します。大名の支配領域ではなく、あえて天皇が定めた律令の「国」にこだわったのは、将軍が天皇に代わって政権を握っていることをアピールしたものと いえます。

統一規格の国絵図は、正保元年(1644)・元禄10年(1697)・天保7年(1836)の3回作成され、特に元禄の国絵図は国郡の境界を明確にするように指示されています。盛岡藩の作成した国絵図は南北8m40cm、東西4m32cmという巨大なものです。広大な陸奥・出羽は分割作成を命じられ、岩手県南の仙台領域をのぞいた北東北3県地域は、弘前・盛岡・秋田の各藩が作成した国絵図に描かれました。北東北3県の枠組みの基礎がここに明確になったといえます。

## 北東北の風景と名所旧跡

古くから歌に詠まれた「みちのく」。平泉や恐山、男鹿半島など、今も歴史や風景を楽しむ人々でにぎわう北東北の名所旧跡は、江戸時代にも屏風に描かれたり刊行物として紹介され、人々の旅心を誘



『盃盆門火乗之図』  
(盛岡市教育委員会蔵/南部家旧蔵)

いました。

江戸時代の盛岡を描いた絵画の多くには「舟橋」がみられます。北上川と雫石川・中津川の合流点からやや下流に架けられたもので、岩手山を背景にした構図が当時の盛岡を代表する名所だったようです。また、お盆の期間中、盛岡の家々の門口では樺の皮に火をつけたものが掲げられ、その光の中を盛岡城から躍り出た200騎の武士が駆け抜けて行きました。今はない盛岡の「門火乗り(かどひのり)」の行事も広く知られ、刊行物にも紹介されています。

## 北東北に生きる人々

厳しい気候や度重なる飢饉に苦しみながらも、江戸時代の北東北の人々はたくましく生きています。金・銀・銅の採掘、木材の伐り出し、漁師や馬方・牛方の様子も絵巻物や屏風、絵馬などに描かれました。

日々の厳しい労働を癒してくれるものが祭です。明治初期の二戸地方の風俗を描いた『陸奥之土風(むつのだふう)』には、「ナニヤドヤラ」の踊りの輪、四角い土俵での相撲「南部角芝(なんぶかくしば)」などを見ることができます。描かれた人々の表情から、労働からのひとときの解放感を感じ取ることができます。

盛岡藩の代表的な銅山だった秋田県鹿



『南部領元禄国絵図』(盛岡市中央公民館蔵)



『陸奥之土風』(二戸市・個人蔵)の「なにやどやら」



『尾去沢御銅山絵図』(盛岡市・個人蔵)の「牛方」

角市の尾去沢(おさりざわ)を描いた屏風には、鉱山集落で暮らす人々の日常が描かれています。銅の精錬などの作業風景とともに、川での水汲み、子供たちの鬼ごっこ、牛方の荷運びのなど、人々の息づかいが伝わってくるような作品です。

### 北東北を旅した人々

俳聖・松尾芭蕉、実測地図を作成した伊能忠敬、北東北の風俗を描いた紀行家・菅江真澄(すがえますみ)と旅絵師・蓑虫山人(みのむしさんじん)、江戸前期の仏師・円空(えんくう)らにスポットをあて、北東北を旅した人々の視点を紹介します。なかでも、松尾芭蕉の『奥の細道』を与謝蕪村(よさぶそん)が絵入りで描いた『奥の細道画卷』や伊能忠敬の地図は重要文化財に指定されている必見の資料です。

### エピローグ

明治の急速な近代化の波は、鉄道の開通によって加速されます。現在の東北本線の開通間もない時期の沿線風景を描いた盛岡藩最後の御用絵師であった川口月村(げっそん)の作品には、近代的な盛岡駅の建物や電線が張りめぐらされた雪深い青森の市街地が描かれています。

また、岩手県の観光と産業を紹介するパンフレットの原画として昭和12年(1937)に描かれた吉田初三郎の『岩手県観光鳥瞰図(かんこうちょうかんず)』は、盛岡の郊外に「兵営」を大きく描き、軍事色の強まる時代を象徴するかのようです。製鉄の町・釜石には煙突が立ち並ぶ工場が市街地以上の大きさで描かれています。一方、都市部や観光地以外の描写は極端に少なく、北東北に押し寄せた近代化の波が都

市への集中と農山村の過疎であったことを暗示するかのような表現になっています。今日的課題を考えさせてくれる作品ともいえるでしょう。

(学芸調査員 時田里志)

#### ■特別講演会

10月3日(日) 13:30~15:00

「菅江真澄と岩手」

相原康二氏(埋蔵文化財センター所長)

10月11日(月・祝) 13:30~15:00

「北東北に向けた新たな視点」

赤坂憲雄氏(福島県立博物館長)

#### ■展示解説会

9月23日(木・祝) 14:00~15:00

青森県立郷土館学芸員による解説会

9月26日(日) 14:00~15:00

当館学芸員による解説会

10月10日(日) 14:00~15:00

秋田県立博物館学芸員による解説会



『奥の細道画卷』の芭蕉と曾良(京都国立博物館蔵/重文)



『岩手県観光鳥瞰図』の釜石(館蔵)